



## 少女雑誌の部屋から

先月より始まった企画展『リボンが好き!!展』は、少女たちの夢と憧れの象徴でもある「リボン」をキーワードとした展示となっております。髪に「リボン」を結んで微笑む少女の姿が描かれた表紙絵や口絵、「リボン」がタイトルにつく小説や漫画、ヘアアクセサリーのみならず装飾品としての活用法などリボンづくしの内容です。中には「リボン」と聞いてすぐに現代の少女漫画雑誌『りぼん』を想像される方もいらっしゃるかもしれませんが、がっかりしてしまわないように『りぼん』のふろく(昭和30年代のもの)もあわせてご紹介しています。どうぞお楽しみくださいね。

## 日本初のリボン製織所

明治27年(1894)、東京・谷中に日本初のリボン工場「岩橋リボン製織所」が設立されました。創設者は白木屋呉服店主だった岩橋謹次郎。出資者のうちのひとりには「近代日本経済の父」と称された渋沢栄一がいます。当初は帽子用リボンの生産が主でしたが、髪掛や装飾リボンも製造するようになりました。のちに社名を変え、東洋一のリボン工場と言われました。

## リボンの全盛期

明治35、36年以後、明治の女学生スタイルひさしがみ(ひさしがみ 廂髪に海老茶袴)が定着し、こののち10余年はリボンの全盛期とっていい時代でした。リボンは髪飾りとして使われるのが一般的でしたが、半襟に縫い付けたり、羽織や時計のひもなどに用いることもありました。

## リボンの流行 移り変わり

1920年代(大正末～昭和初め)に入ると、それまで女学生たちがこぞって頭を覆うようにつけていた“大きなリボン”は姿を消しました。1930年代末(昭和10年代半ば)に短期間復活しましたが、当時は「明治の女学生のリバイバル」と言われたそうです。

## 影をひそめていったリボン

昭和12年(1937)に日中戦争が始まると少女雑誌にも軍の検閲が入り始めました。華美に描かれた少女画がとがお咎めを受ける中、『少女の友』では「そんな時代だから美しいものを」と中原淳一が描いたリボンをつけた少女画を掲載し続けましたが、昭和15年(1940)、ついに軍の圧力により淳一の絵は誌面から消えてしまいました。

## カールとリボン

昭和23年(1948)頃、少女たちにパーマをかけさせることが流行しました。その流行の波は都会だけではなく、地方にまで及んだそうです。少女雑誌の表紙には、内巻き、外巻き、縦ロールなど、カールした髪型の少女たちがにっこりと微笑んでおり、少女スターたちはみな一様に愛らしくカールした髪にリボンをつけていました。